
未完の・・・・・

みゆ貴茂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ
テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者また
は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ
ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範
囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し
ます。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

未完の・・・

【Zマーク】

Z2660F

【作者名】

みゆ貴茂

【あらすじ】

素直になれなかつたから。でも、きっとまだ遅くない。

また、この町に戻ってきてしまつとはな……。
もう、一度と戻るまいと思つてたのに。

あんな歌、聴いてしまつたから。

あいつが好きだった歌

。

あいつと一緒に聴いてた歌

。

今更、なんで流れくんだよ……。

「シ・シ・シ・シ・シ……」

「その癖、なおつとらんなんあ竜坊は」「
昔よく、通つてた居酒屋。

およそ十五年ぶりに帰つてきた俺を変わらず迎えてくれた。
相変わらず客足は悪く、閉店間際のこの時間、客は俺しかいない。
よく、潰れないでいてくれたものだ。

「ん？」

「そのカンウター、トントンする癖」

店主のオヤジは肴を作りながら懐かしそうに目を細めた。
このオヤジも、ほんとに十五年の時が流れたのかと疑いたくなる
ほど変わつてない。

あの頃からオヤジだったからな。

「…………」

俺は苦笑いを浮かべて目を伏せグラスに残つていた日本酒を一気
に呷る。

そして、さりげなくカウンターにおいた方の手を引っ込んだ。

「せりふ」

オヤジが肴を出してくれた。

「好きやつたやつへ辛子高菜」

「あつうん」

皿の前におかれた小皿の中の辛子高菜を見て、思わず口元が緩んでしまひ。

今はわざと全国ビールでも手に入るナビ、レの店のは。

俺は箸でほんの少しだけそれを摘み口に運んだ。

「…………」

辛い。

「じゅ~？」

「…………つまつま」

ペコシと下を刺激する辛さが鼻を抜け、涙腺を刺激する。

「ロロロ……」

「…………ちかくぱつまかあ…………」

喜びと懐かしさに埋もれることができなくなり、笑みと涙が同時に流れてしまひ。

「せりふ」

「ありがとう」

オヤジが日本酒の一升瓶を差し出してくれた。

グラス一つぱにに注いでもらひ、日本酒をぐいっと口に流しこんだ。

「でも、せとよひ帰つてきたな」

「…………」

「憶えどるか？竜坊はほんと無口やナ、そこは座ったアキちゃんが

ひつきりなしにしゃべつよつたなあ

「わへ、アキの話はこいつぢや。あいつも結婚して幸せになつとつよひやし」

「あん？ アキちゃん結婚なんかしたりさよ」

「えつ！？」

俺は驚きのあまり持っていたグラスを落としてしまつ。グラスはカウンターの上を転がり、日本酒の水溜りができてしまつた。

「ああーあ、これで拭け」

「あつごめん」

おれはオヤジから渡された布巾でこぼした日本酒を拭いながら、「でつでも、店に知らん男があつたばい？ 仲よしどうたし

思わず口を滑らしてしまつ。

アキの家は代々続く、老舗の和菓子屋である。かつこわるい。

女々しく、昔の女を陰から見てきたことがばれてしまった。

「大吉のことか？ あればアキちゃんの弟やろ？」

「はあ、アキに弟とかおらんかったやろ？」

俺の記憶ではアキに弟なんぞいなかつた。

少なくとも、あんな年の近い弟なんかいるはずがない。

「ああ、そやけ、遠い親戚たい。アキちゃんがいつまでも結婚せんけ、親父さん諦めて大吉を養子にしたんよ。たしか

「そんな……俺はてつきり幸せになつてくれたものと

俺は頭を抱える。

「なんで？」

「竜坊！ ……それはお前さんが、一番わかつとらないけん」とやうが！？」

オヤジの少しだけ怒氣の孕んだ言葉が俺の頭上に浴びせられる。俺はゆきくりと顔を上げ、オヤジの顔を見た。

「…………」

オヤジは優しげに笑つている。

昔からいつぱいだつた皺をいつそう深めて。

「コシ・コシ・コシ・コシ・コシ……

無意識のうちにこいつらの癖が……。

「…………」

「アキちゃん。町のみんなから噂されどいるんだ。あんな美人でもいきおくれることもある、とかなんとか」

「うつ…………」

「竜坊　いや、竜司つ……。」

「つーっ。」

オヤジはじめひちやんと名前で呼ばれてドキッとなる。

オヤジはいつも俺を子供扱いして竜坊と呼んでいた。

「アキちゃんに会つてちゃんと話してきーーーもう、責任の取り方くらーわかる年になつたやろづがーー？」

「…………」

「…………」

「コシ・コシ・コシ・コシ・コシ……

この癖が……。

俺は店を飛び出した。

『なんでなん？なんでそんなこと言つた？』

『今、言つたとおりやけ』

『私が創作活動の邪魔つちゅうつと？』

『ああ。お前とおつたら、お前のじとばつか考えてしまつ。』

『嘘やん。私の家のせいやひ？お父さんがなんか言つたんやひ？店、

継げんのやつたら別れてくれとか』

『関係ないつ！』

『関係ないことなんかないつ！…私は竜りやんと』

『もう、これ以上、俺のじと困らせんで……。俺は町をでる。お前

はこの町で、結婚し……』

『馬鹿やん。あんたほんと馬鹿なんやけ』

。

「アキ……」

俺はアキの実家である店に全力で走った。

「アキつ…！」

「えつ…？」

アキははちよど店の暖簾を外そつとして表に出でいた。

「…………」

アキがゆつくり俺の方に振り向く。

「竜……ちゃん……？」

アキが暖簾を地面に落とした。

暖簾の棒がカラカラと夜の静かなこの町の道に響く。

「なんでなん？」

俺はアキから十数メートル離れたところから言葉をぶつかる。

これ以上、近づけない。

十五年間が……十五年の時間がこの距離を縮めてくれない。いや、違う。これは十五年前、あの瞬間に出了きた距離だ。俺が突き放してできた。

「なんで？結婚しとらんのか！？」

罪悪感からかついでアキを責めてしまつむつな言葉が口から出てしまう。

いつも、そうだ。

ほんとは……ほんとは、アキのこと。

なのに、いつも素直になれず、傷つけてしまひ。

「俺は結婚しきりつち

「私だって、結婚しようと思つたわよ……」

「…………」

「結婚しようと思つた。お見合いでつてした。私を捨てたあなたのことなんか忘れようと必死になつた」

「…………」

「でも、だめやつたんよ。なにやつても、あなたのこと思い出すアキの頬を涙がぬらす。

それは同時に俺の頬もぬらした。

「朝、お味噌汁飲んだとき、あんたが毎日『もつと濃くしてくれ』って文句言つとたとか、

雨の日には、私がわざと傘忘れてあんたと同じ傘に入りうりじつたこととか、

スクーターが通る音を聽くたびにあなたの背中を思い出す

「もつ……こ……」

「どんな男と付き合つても、竜ちゃんとは違つ。

竜ちゃんはこんなことせん……。

竜ちゃんはもつとわづげなくて、つて

「もつ……やめてくれ……」

「……こんな気持ち抱えたまま、他の人と一緒になれるはずないやないの……」

「うう……うぬ……」

俺は 俺は アキの一生を台無じにしてしまった……。
謝つて許されることじやない。
悔やんでも悔やみきれない。

どうしたら……こいんだ。

「どうして、むうと早く迎えに来てくれなかつたんよー?..」

「…………つー?」

「私、こんなおばさんになつたやないのー!..」
アキは涙と鼻水で顔をぐしょぐしょにしながら叫んだ。
そして、俺の胸に飛び込んでくる。

俺が突き放した距離を

俺がずっと越えることのできなかつた距離を

「アキ

「…………」

トン

「えつー?」

トン・トン・トン・トン……

アキが無言で俺の背中を人差し指で打つ。

これは
……。

「アキ……」

俺は 俺は
……。

俺はアキをぎゅっと強く抱き返した。

そうだ

俺は泣いたときからお前のことを

トノ・トノ・トノ・トノ...

口下手で、どうしても口に出来なかつた言葉。
それでも必死で伝えたくて、アキの好きだった歌を真似て贈り続けたサイン。

『竜坊、そのトントンする癖、なおしこよ』
『……』
『ここんよ、おじさん。私、竜ちゃんのこの癖好きやけん』
『……』

アキ、確かに前のお前とおつり、俺もお前も年を取ってしまったな。
でも、俺はこれからもずっとお前を。

ト・ト・ト・ト・ト・ト

ア・イ・シ・テ・ル

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2660f/>

未完の・・・・

2010年10月8日15時14分発行